經濟論叢

第七十五卷　第六號

流民續考……穗積文雄…(1)

新中國における工商業の調整について……三木　毅…(16)

フランスにおける初期マルクス研究の動向……吉田靜一…(34)

エム・ラヴェリチエンコ
「資本主義諸國における農民の貧困な狀態」
オークレスメット
「植民地、從屬諸國における農業の衰退」……富岡　裕…(44)

資本蓄積……モーリス・ドッブ…(50)

〔昭和三十年六月〕

京都大學經濟學會

第七十五巻　四五一　第六號　五〇

資本蓄積

――堀江英一助教授への答辯覺え書――

モーリス・ドッブ

〔編集者あての手紙〕＊一九五五年一月一九日

拜啓

『評論』〔Kyoto University Economic Review〕一九五三年四月號に掲載の堀江英一助教授の論文にたいする短い返答を同封いたします。貴誌のどの號かに御掲載いただければ幸です。なおまた、堀江助教授へは、この論文を多分お送りするだろうという旨を傳えておきました。同助教授からは、わたしの意圖をよろこんでおうけするという御返事をいただいています。敬具

モーリス・ドッブ

〔＊〔　〕のなかは譯者の補足である。以下同じ〕。

資本主義の發展に關する私の見解についての堀江英一助教授の議論＊は興味あるものであるが、そのなかには一つの批判點がある。失禮ながら、この點について述べることを許していただきたい。これはいわゆる「本源的蓄積」の問題、すなわち私の『資本主義發展の研究』第五章のなかの、本源的蓄積の過程には二つの局面があるという私の提案についての彼の批判である。蓄積された資產のいわゆる「實現」という第二の局面に關する私の考え（かれはそれを「形面上學的な」、「馬鹿げた」、「滑稽な」ものとみなしているのだが）を批判して、彼は強調する價値があり、私も贊成できるいくたの點をついている。それと同時に、彼はこの問題について私がいおうとしたことをただしく說明してはいない（疑もなく、きわめて不明瞭にしか說明していない）。そして重要であり、當然考慮さるべき（であると、私が信ずる）現實の歷史的過程の若干の諸局面を無視し

てしまつているのである。

* "Dobb's Theories of Economic History" Kyoto University Economic Review, Vol. XXII, No. 1, April. 1953, pp. 30-45.

私の著書のなかの、蓄積の理論的な面についてふれた章（その第一節）では、私は蓄積の致富概念と稱すべきもの、つまり一グループもしくは一階級の致富が過程の本質をなすものであるとみる（とくにゾムバルトの名と結びついた）見解をたたき、その代りに、資本家的生産の前提條件としての過程の本質は、收奪にあつたことを強調することに、主な關心をもつていたのである。この點を堀江助教授は述べていない。あまりに明白なことであつて、述べるまでもないと考えたのかもしれない。とにかく、私はかれがこの點では同意するものと推察する。そうであるとすれば、彼のいい分は、私がゾムバルト的見解を充分に否定しきつていないということ、つまり致富が本源的蓄積の副次的一面であつて本質でないということだけでなく、致富が全くどんな役割りも演じなかつたといい切つていないということにあると、推察する。資本家的生産のための舞臺を準備するうえで、致富がどんな役割りも演じなかつたと極端にいいきることを私が好まないということは、まつたくその通りである。たとえ全體としては從屬的な役割であつたにしても、それがある一定の役割を演じているということは、すぐに述べるような理由からして、私には否定できないように思われる。他方、もし堀江助教授がこれを拒否したくなければ、致富がどんな仕方で行われたかを説明しなければなるまい。「實現の局面」についてかたつたときに、私がひきあいにだしたあした類の事例をもつてこないでは、彼がこのことを説明できないと私は考える。

このことはもちろん「二つの道」の問題に關連する。「二つの道」とは、つまり、賃勞働を基礎として生産を組織しつつ商人および資本家になりあがつてゆく小生産者の道と生産に轉向し生産に資金を供給し（ある程度は生産を組織し）てゆく商人資本の道とのことである。堀江助教授は、資本主義の初期の段階にあつて、非生産的資産を蓄積しつつあるものはただ後者とむすびついたひとびとにほかならなかつたということ、小生産者の間からなりあがつてゆく資本家にあつては「致富」は主として利潤を新しい生産手段にすき込んでゆくという形をとるということ、を正當に指摘している。このように、致富には二つの種類があつて、それぞれ特殊な社會的・經濟的性格をそなえている。資本主義の成長が第一の道をとるかぎりは、非生産的資産の獲得と蓄藏という意味での蓄積の先驅的局面は存在しない（したがつてそれに伴う「實現」の局面も存在しない）のであつて、致富と資本家的生産の擴大とは同時に存在するし、實際上相並んで進む過程なのである。

しかし（堀江助教授があきらかにとつているような）この單純なやり方で問題をかたずけようとすれば、二つの困難がおこつてくる。第一に、とにかくあの時期のイングランドでは、資本家的生産の成長の助けとして、第二の道の影響を、われわれは全く無視しさることはできないと信ずる。マルクスが、たとえ第一の道を「眞に革命的な道」とよんでいるにしても、第二の道が「過渡的樣式として、歴史的に」ある點まで役立つたことを否定したのではないということは、全く明白だと私には思われる。これら二つの道の間には、あきらかに、複雜な相互作用が存するのであつて、ある決定的な時期には、第二の道が、(a)小生産者の間からなりあがつてゆく胎芽的資本家のための市場を擴大することによつて、(b)彼らに資金を供給することによつて、資本家的生産の擴張を促すうえで、準備的なもしくは補助的な役割を演じたのである。大抵の初期の段階では、(a)の方が比較的重要であつたように思われるが、しかし(b)はそれが小生産者のうえにからみつけた依存關係ときつてもきれないようにむすびついていて、〔それだけ〕非常に早く障碍物に轉化し反動化したのであると思われる。さらに、販賣と資金供給の兩者についていえば、商人資本の「上からの」影響は、それが生産支配の封建的方法（たとえばギルトや自治體の政治的强力による獨占的諸制限）に依存できる程度に應じて、ややもすれば生産の利益を制限し、それと衝突しがちであつた、そして、そのことはまた、商人資本が封建的支配階級と同盟（たとえ動搖しがちな同盟であろうと）を結んでいた時期にあつては、一層ありそうなことだつたのである。しかしブルジョア革命後には、第一の道の生産者への商人その他による資金供給が從屬的になり、制限的になつたことを意味するとは考えられはしなかつた。そして十八世紀イングランドにあつて、產業革命のさまざまの段階で、あきらかにこうした資金供給が澤山行われていたと思われる。さらに、「商人貴族」の富の一部がのちに資本家的企業家の手にわたつたということは、「商人貴族や貨幣貴族や土地貴族が產業ブルジョアに變身した*」という風にいうことではない。

＊　堀江前掲論文四二頁。「十六世紀中葉から十七世紀前葉にかけての時期は封建的生產樣式の崩壞の時期であつて、決して資本家的生產樣式の實現の時期ではなない」（前掲論文四二頁）などとは、私は、私の知るかぎりでは、述べもほのめかしもしなかつた。封建的生產樣式の崩壞は、もちろん、十四世紀以來進行してきた。十六世紀にあつては、生產者層からなりあがりつつある「產業ブルジョアジー」（彼等は、なお、全く小規模な資本家であつたとはいえ）が存在したのである。そして當時資本主義は相互作用によつて擴大しつつあつた。相互作用とは、また、（堀江助教授が正當にもいうように）二つの道の矛盾である。

第二に、資本家的生産様式が、もつぱら第一の道によつて發展したと想定することが現實的であると假定した場合でさえ、われわれが產業革命としてえがくほどの技術上の――諸生產力ならびに諸生產方法上の――質的「飛躍」がどのようにして資金の供給をうけることができたかを、しることはむつかしい。というのは、こうした時代にあつては、擴張は流通利得から全面的に資金を仰がねばならなかつたであろうし、第一の道のパイオニア企業家は、相對的にいつて、小規模な資本家であつたからである。もつともつと成熟した段階になつてからは、「擴大再生產」という主な要求は流通利潤（カレント・マンヴロフィット）つまり剩餘價値の產業への再投資（問題の最近の討論でいう「內部金融」）によつてみたされることができた。もつともこの段階でさえ、投資銀行業務の役割に關する最近十年間の論議が示すように、いつでもそうであるとはかぎらないのであつて、われわれは、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて、以前商業（重商主義下の商業のように規制され獨占された商業）とか地代から蓄積された富から流れでる資金供給、換言すれば以前に富をたくわえて保守的になり、大規模な工場的基礎の上に生產を發展させている積極的な「キャプテン・オブ・インダストリ」と立場を異にする社會層から流れだす資金供給に、第一の道にそう進步が依存しているという事實をしつているのである。

＊「資本制的蓄積に先行する……すなわち資本制的生產の結果でなくその出發點たる蓄積」としての、マルクスの「本源的蓄積」の定義を參照せよ（『資本論』第一卷モアおよびアヴェリング譯七三六頁）〔長谷部譯第一卷一〇九二頁〕。また工業化をおくらせた十六・七世紀の投資問題に關しては、E・J・ホブスバウム『十七世紀の危機Ⅱ』Past and Present, No. 6. p. 52. をもみよ。

もしこのことが本當であるとすると、殘る問題は、商人貴族の致富であろうと、高利貸や地主の致富であろうと（堀江助教授の「商人貴族、貨幣貴族および土地貴族」の致富であろうと）、いずれにしてもその先驅的な致富が、どうしてのちに資本家的生產の擴大に役立つようになるかということである。「實現の局面」についてかたつたとき、わたしはこの問題のことをいつていたのである。そして、私は今なお、それが、堀江助教授の考えるように、ありもしない僞りの問題であるなどとは、信ずるにいたつていない。具體的な例をあげよう。イングランドにおける資本主義の成長が、重商主義時代を通じて獲得された植民地略奪物――とりわけ東インド會社のいわゆる「インド歸り（ネイバッド）の大盡」によつてインドからもち歸られた利得や略奪物――によつて助成され促進されたことは、普通いわれていることである（そしてマルクスもたしかにそうだと信じていた）。海外で植民地的搾取から獲得されたこの富が、どのようにして又なにゆえに、イングランドで資本家的生產の擴大をたすけたかは全

くあきらかでないのである。*

* もう一つ別の例としては、マルクスが「本源的蓄積のもつとも強力な槓杆の一つ」とよんでいる公債の發展があろう（前掲書七七九頁）〔長谷部譯一一四八頁〕。公債所有者の致富はいかに資本家的生産をたすけたか。

こうして致富と蓄積が資本家的生産そのものの擴大に若干時間的に先行するものであり、それとは別個のものであつたかぎり、それは（土地や家屋、公債や貴金屬のような）現存資産の獲得から、言葉をかえていえば、それらの所有權の集中もしくは所有權の轉移から、なりたつほかにありえなかつた。たとえこれらの資産がもともと封建的階級もしくはその同盟者（チューダーおよびスチュアート時代の商人貴族など）の手先に集められたものであつたとしても、それらはその後ブルジョアジーの手に渡らざるをえなかつたのである（たとえば共和制時代を通じての王黨派の所領の沒收および販賣）。しかしこの集中が、まず第一に、多かれ少かれブルジョア（たとえば十八世紀のホイッグ貴族階級）の手中にあつたときでさえ、蓄積された資産を積極的なブルジョアの手に――生産および取引の新しい形態の擴大を積極的に組織しつつあつたひとびとの手に――渡すことが依然として必要であつた。十八世紀のイングランドでは、大土地所有者のあるものがみずから自分達の所領で進歩した資本家的農業の推進者となつたことは事實である。他のあるものは、直接に、自分の所有地にある鑛山企業に融資した。しかし、主に、自分の富を直接に生産用役に投じたのは、これらのもとから富を蓄えていた連中ではなかつた。つまり資本家的生産を推進するためにこうした蓄積を利用することは、間接的で二次的であつたのである。

〔蓄積の〕持ち手をかえることのほかに、それ以外のなにかが必要であつた。というのは、公債や田舍の邸宅や貴金屬といつた風な資産の保持が、直接企業者をして生産擴張を可能ならしめることはできないからである。それができるためには、こうした資産が「實現され」、それでもつて實際の生産手段を購入できるところの流動基金にかえられねばならない。これが、「實現の局面」そのものを完結すると、私がいつたことの意味である。

だれか個人の場合この過程がなにを意味するかということをしるのは、全くたやすいことである。個人は、ただ、買手をみつけるか、こうした資産を擔保として抵當に入れて誰か自分に金をかしてくれる人をみつけさえすればよいのである。たやすくないのは、この過程が社會的規模ではなにを意味するかを知ることである。というのは、もしすべてのものが一齊にこうした資産を實現するものとすれば、少くとも最初の價格下落の兆候でそれつとばかりに市場にひきつけられるような、これら資産の無數の潜在的買手がいないかぎり、その價格は下落し（そ

の所有者は必然的に貧困化する）であろうからである。堀江助教授は、適切な質問を放つ――これまでの蓄積の對象だつた資産は誰にうられるのかと。しかしブルジョアジーが資産をもう一つ別の階級にうりわたすということはできない、なぜかといえば、このことは「非生産的資産だけを買う一つの階級」の存在を暗にほのめかすことになろうからである、と述べる（四一頁）だけで、こうした實現の局面の非現實性をあきらかにしたと、彼は思つているらしい。おそらくこれらの資産はもう一つ別の階級にうられることはできないであろう――もつとも、そのうちのあるものを收入で手に入れるくらいの餘裕はまだ充分もつているような以前の封建貴族のいき殘りがいるということは充分ありうることなのであるが。しかし一つの階級としてのブルジョアジーは同質的ではない。そしてブルジョアジーのうちで、多分反動化して金利生活者風になつて、生産から遠ざかるようなある層が、産業資本家という勃興してゆく積極的な層が資産を賣ろうとねがつているちようどその時に、こうした資産に對する好み（たとえば田舍の邸宅への隱去や公債所有者の收入）を身につけてゆくという風なことは、全くありうることである。さらに、もつと世界市場にまたがつて動くような型の資産のあるもの、例えば貴金屬のようなものは輸出することができる。〔貴金屬のようなものを輸出するという〕このことは、輸入原料や資本財の輸入代金の支拂をすることによつて、一國以上の産業化の過程の決定的局面を橋わたししてきた。最後に、もちろん銀行制度の勃興ということがある。この制度は、貴金屬や抵當地の寄託をうけ、公債その他の抵當を擔保に、勞働力や未利用生産資源の豫備を生産にむける手段である。事實、資本主義の開花期における銀行の歴史的役割は、非流動資産の買人もしくは「流動化」を容易にする一つの制度としての役割にあつたということができよう。しかしイングランドでは、産業革命時代には（のちのヨーロッパ大陸諸國とちがつて）、短期貸付以外の銀行はまつたく未發達であつた。そして急速に擴大する商工業の必要をみたすようになつた小「地方銀行」の分散した組織が弱體で不安定であること、金融恐慌と破産の周期的流行にさらされやすいことを、暴露した。

從來のブルジョアの致富がいかにして工場制工業への轉換過程における資本主義の急速な擴大（斷續的躍進の性格をおびていた成長の急速な促進）をたすけたかというこの問題にたいする實際に歴史的な解答が何であるかを、私は知つたかぶりをするつもりはない。だが、それが全くの見當はずれの問題だとは、私は考えない。そしてとくにこの問題に留意して、具體的な解答をえるために、もつと實際的な研究がなしとげられないかぎり、われわれの「本源的蓄積」と産業革命との兩者の說明には、重大なギャップが依然としてみたされないで殘るだろうと、私は信じている。

したがつて、要約すれば、つぎのようにいうことができよう。つまり社會的な視點から全體としてみれば、問題は、蓄藏されていた富（たとえば金）の輸出を意味する場合を除けば、未利用潜備――とりわけプロレタリア労働力の豫備――の問題だけである。社會的な規模では、生産の擴大ならびにそれに伴う「生産的消費」の擴大は、ただ流通所得（もしくは産出物）の投資によつてのみ資金を供給されえたのである。しかし個人的視點から（もしくはブルジョア階級のなかで新工業の積極的な企業家たる部分の視點から）すれば、一つ問題がある。それは、企業家自身の流通利潤でなしうるよりもつと急速に生産が擴大できるように（「擴大再生産」が進行するように）、投資可能な資源をどうして動員できるかという問題である。かれらがこのことをやるには、あの種の抵當をいれて借金するか、さもなければ以前に蓄えた富（つまり自分が以前に蓄えたか、または他人が蓄えたものであつても、その後ある過程をへて自分の手に入つた富）を他人にうりはらうかするほかなかつた。資本家階級のうちでこの積極的な、先頭をきつている部分――第一の道の資本家――が（なりあがりものであり、なお小規模であるという意味で）一層「デモクラテイック」であればあるだけ、それだけ一層このことが問題となるのであつて（堀江助教授が暗にほのめかしていると思われるように、一層問題となるのである）。

この覺え書のなかで強調してきたことは、全體として、私の書物の「資本蓄積と重商主義」の章で強調したのと反對のことである、ということを最後にもう一度念をおしておこう。あそこで私が強調したのは、富の先驅的蓄積そのものが資本主義の成長をたすけることはできなかつたということ（つまりもう少し後の段階でこうした富が處分され「實現され」ることのないかぎりそうであること）であり、また事柄の本質は所有權の集中をともなう收奪であつた、ということである。とはいうものの、もし收奪が、この準備的な段階についていえる一切であるとすれば、蓄積という言葉は誤用であろう。收奪が經緯の全體であるとは考えないし、またブルジョアの先驅的な致富が少くとも資本主義に寄與する役割を果したと信ずるからして、私は、致富が現にあつたような影響をどこでどのように及ぼしたのかを指摘して、ここで強調點をおぎなおうとしてきたのである。そしてそのことは、私にとつては、以前に獲得した資産を「實現する」ブルジョアのある層について問題がある、といつたことと同じことなのである。（尾崎芳治譯）